早稲田大学女子バレーボール部の文化研究
Waseda University Women Volleyball team's Culture

1K06B223　　森田　絵美
指導教員　主査　寒川恒夫先生　　副査　矢島忠明先生

【序章】
「日本一のチームになりたい」「勝ちたい」という組織として強く目標に向かう思いや、信念があり、その思いが辛い練習や試合、弱い自分を打ち破る源泉。組織にとって重要なのではないかと思った。その組織にそういった思いを生まれさせる源はどのようなものなのだろうか。スポーツ人類学的に論考していきたい。

【第１章】
自文化を理解するために、早稲田大学バレーボール部の行動様式を抜き出していく。まずは、早稲田大学女子バレーボール部の概要でおおまかなアウトラインをたどる。また、早稲田大学女子バレーボール部を取りまく環境として「競技スポーツセンター」「稲門バレーボール倶楽部」を取り上げている。

【第２章】
早稲田大学女子バレーボール部の現状が述べられている。スタッフ・部員数、早稲田大学女子バレーボール部の顔である役職について。主に主将を含めた４つの役職である。また、年間スケジュールとして大まかな大会をあげ、どのようにそれに合わせて動いてゆくのかとういう視点から見ている。

【第３章】
早慶バレーボール定期戦は早稲田大学の出場する大会の中で最も史伝的な大会である。この長い伝統の元、早稲田大学バレーボール部としては「公式戦」つまりオフィシャルな場と同様な扱いで行われる大会である。それは、慶應義塾大学も同様、双方がこの早慶戦に対して伝統ある公式な試合だと心得ているのである。

【第４章】早稲田大学女子バレーボール部には、長い間培われてきたさまざまな文化があり、その文化が人づてに受け継がれ、後世に伝承されてきた。それが「ＷＡＳＥＤＡ　ＷＡＳＥＤＡ　ＳＰＩＲＩＴＳ」や「ＤＮＡ」なのである。

【第５章】
その１日の試合の為に全力を投球し、チームで戦う準備を行い試合では練習で培ってきたものを信じて「やるだけ」と全員で意思統一する。試合会場に集合して、解散するまで全員同じ気持ちで戦う。この１日は、早稲田大学女子バレーボール部にとって、魂そのものがあらわれると言ってよいだろう。

【第６章】
アンケートを５枚にまとめ、配布を行った。本来ならば、フィールドワークとして実際にその組織に交わり、体験することが望ましい。しかしながら、互いに試合前ということや関係として敵同士ということもあるため直接その文化へとはふれあうことが困難であったので、気軽にたくさんの意見を習得出来るようアンケート実施を行った。

【第７章】
ペナルティーは、組織が成り立って行くためには、組織の一員として自覚することが大切である。組織の背景にあるものの大きさを理解すことと同時に、その組織に属する一員としての責任を持った行動をしなければならないことがわかってくる。ペナルティーは、組織に属する者としての責任感の欠如の回復としておかれてい

るもので、組織を束ねる帯をさらに強めるものとして存在しているのである。

【結章】

最後の最後で勝負の鍵を握る要素は、技術ではなくその一人ひとりが、組織における「志」ではないだろうか。その志の形は、全員が同じ形でなくて良いと思う。しかし、その志の強さや深さは、互いに強く思っていなければならない。その志を輝かすためには、早稲田大学女子バレーボール部としての自覚と誇りをことが必要である。